

ぬくもり

編集と発行 人権啓発ネットワーク大東
〒574-8555 大阪府大東市谷川1丁目1番1号
電話 072-870-0441 FAX072-872-2268

沖縄本土復帰 50 周年映画会

ひまわり

～沖縄は忘れない、あの日の空を～

8月27日(土) @大東市立市民会館 2階キラリエホール

映画の始まりは、風が吹く丘で立ち尽くし遠くを見つめる良太の厳しい表情と姿から始まります。その後、戦後の沖縄に場面は変わります。一緒に鑑賞した 5 歳の子は、沖縄戦の映像が流れ、大きなジェット機が飛んで来るシーンや爆撃^{ばくげき}のシーンでは思わず耳をふさいでとても驚いていました。日本で唯一、陸上での戦闘が展開された当時の沖縄の子どもたちは、比べる事ができないほど、もっともっと怖い思いをしたのだと実感しました。

私は、大人になり改めて平和と戦争について学び直しました。平和学習というと、広島や長崎への原子爆弾の投下という、被害についての学習がほとんどだと思っている方は多いのではないのでしょうか。学び直



す中で感じたのは、戦争そのものについて考える必要があるという事です。戦争が人を変えてしまうこと、暮らしを変えてしまうこと、社会そのものを変えてしまうことの恐ろしさを伝えていかなければならないと思うようになりました。

映画の後半は、宮森事件から 50 年以上経った今を生きる琉一の話に展開していきます。琉一は自分の祖父が

宮森事件の関係者であることに気づき話を聞こうとしますが、良太は頑^{かたく}なに語ろうとしません。良太は、事件の直前に友だちの一平に何気なく言った一言が原因で、「一平は自分のせいで亡くなった」と思い込んで

していました。一平の命を奪ったのはアメリカ軍のジェット機なのに、良太は 50 年以上も悔やみ続けていたのです。良太だけではなく、同じように苦しんでこられた方が沖縄にはたくさんいます。良太の心を動かしたのは、「同じ思いを二度とさせてはならない」という思いで、当時のことを語る仲間の姿でした。

また、琉一と加奈の姿を通して今も沖縄にある米軍基地について考えさせられました。加奈の父は米軍基地で働いています。生きていくための仕事として米軍基地で働く父への思いと、宮森事件から基地のあり方について発信しようとする琉一の思いの間で葛藤します。悩んだ末に、加奈は一つの結論にたどりつきます。どちらかの立場で自分の行動を決めるのではなく、「自分はどうしたいのか」で行動を起こします。加奈の姿は今の日本と重なりました。外交として安全保障のために基地を置くことと、国民の命を保障するために基地は置かないこと、どちらかの立場で揺れているのではないのでしょうか。基地の問題は、たくさんの基地がおかれている沖縄だけの問題ではなく、私たち一人ひとりの反戦平和の問題なのではないかと改めて考えさせられました。

「戦争は最大の人権侵害である」という言葉を思い返すとき、沖縄の「命どう宝」という言葉も重なります。大切なものは何かを見失わないように、その一歩は戦争に向かっていないかをしっかりと考えていきたいです。

(レポーター:こっさん)

ストーリー

激しい爆音とともに米軍のヘリが沖縄国際大学へ墜落した。事故現場を見た山城良太は、52 年前の石川市(現うるま市)の空を思い出していた。良太は宮森小学生 6 年生で仲良しの、茂と豊と二年生の一平たちと元気に遊び回っていた。新学期、転入生の宮城広子に良太はほのかな恋心を抱いた。沖縄の青い空の下で、良太の家族も、一平の家族も、広子の家族も一生懸命に生きていた。1959 年 6 月 30 日、突然、米軍のジェット戦闘機が墜落し炎上しながら宮森小学校へ激突した。悲鳴をあげながら逃げまどう子どもたち、良太は広子を助けようとしたが、広子は大きな傷を負い息絶えていた。校庭には一平の変わり果てた姿があった。悲しむように花壇のひまわりが風に揺れていた。

それから 53 年目の 2012 年、年老いた良太は妻を亡くし娘の家族と同居していた。孫である大学生の琉一はゼミ仲間と共に沖縄国際大学ヘリ墜落事件と宮森小ジェット戦闘機墜落事件のレポート活動を始めた。頑なに事件の真相を語らない良太だけでなく、事件の傷跡は今も深く遺族の心を苦しめている。琉一はゼミ仲間と共に基地と平和を考えるピース・スカイコンサートを決意するが、恋人の加奈との不和など、コンサートを前に様々な問題が起きはじめる・・・。

となりの ^い ^い 活き生きサン



ここでは、大東市の人権推進につながる
取り組みを行っておられる方々や団体の
紹介をさせていただきます。

「みんなちがってみんないい」

7月29日～30日大東市立総合文化センターにて岩見尚子^{いわみなおこ}さんの写真展が開催されました。



ご自身の、発達障がいのある娘さんの子育ての経験と、
写真スタジオに勤めた経験^{つと}から、「子どもたちの特性に合
わせ、開放感のある公園や、なれ親しんだ場所^とで
寄り添った^よ撮影^そがしたい。」そして、「発達障がいの子ども
たちを知ってもらいたい。」という思いがきっかけです。

尚子さんの娘さんは、2歳のとき発達が少し遅いと指摘さ
れ、小学校2年生の時に発達障がいと診断されました。親として今後この子とどう向き合うか悩みました。そ
して、「娘が社会に旅立つための道を作るため小さな事でも何かしたい」と、同じ思いの仲間と共に、「世間
に知ってほしい」気持ちを込め、カメラを抱え写真という形で発信しておられます。

「みなさん発達障がいという言葉は知っていても、発達障がいの子どもは(ものごとを)理解できないと思
い込まれていることや、子ども達が抱える生きづらさを知っていただき、手探りですけど、子どもが学校や社
会で無理のない生活を過ごせることを考えています。」と涙を浮かべお話をされていました。

育児で悩む親、子どもの将来で悩む親、みな同じです。でも、ひとりで悩まず少しでも誰かに相談できるこ
とが大切ではないでしょうか。尚子さんに出会って、改めて「ひとりで悩まないで!」と感じました。

(レポーター なっちゃん)



人権啓発ネットワーク大東では、
マスコット&愛称を募集しています!

詳しくは 人権啓発ネットワーク大東事務局 まで!



日 々 雑 感

子どもの頃より、誰に見せることもなく、教科書の余白、ノートやメモ帳、手帳などにスケッチやメモを描いてきた。絵の描き方は教わったことがなく、「超我流^{ちようがりゅう}」で描いてきた。私の場合は、「シミュクラ現象」※を強く感じるのだと思うのだが、様々な環境の中で、「顔^{しんしやう}」に見えるという心象風景がある。家屋の木目や窓、壁、天井、シミ、穴、へこみ、影、ドアノブ、スイッチ、コンセント、ねじ穴、蛇口、ポット、様々な生活用品、車や電車、駅や交通アクセス、街並み、草木や河川、山や海、空、雲……きりが無い。様々な外観や内観のほとんどに「顔」が出てくる。

そして、日常生活の中で、「何々は、何々に見える」とか「何々は、何々に似ている」ということをいっぱい想像している。他者には「どうでもいいこと」なんだけど、こちらは「どうでもいいことではない」ほど、気になってしまう。その心象風景をミニスケッチブックや手帳に描いて「気持ちの荷おろし」をする。描かなかつたら、それなりにストレスが重なってくる。我ながら、「めんどくさい」限りである(笑)。まあ、長いお付き合いなので、私自身の心模様^{ていかん}の大切な領域であると諦観^{ていかん}している。



© 2015 sketchnotabibito

※シミュクラ現象とは、3つの点が逆三角形に配置されていると、「人間の顔」に見えてしまう現象のこと。パレイドリア現象(ある形状のものが他のものに見える「錯覚^{さくかく}」)の一種といわれる。

(レポーター:ねこたん)

★ 会員募集

人権意識をたかめるための研修会などへの参加・参画。
人権尊重の理念を広く市民に広げるための啓発・広報活動など。会費等はありません。

★ ヒューマンライター募集

大東市で人権推進につながる取り組みを行っている方々の取材をしていただける方(ヒューマンライター)を募集します。



【応募方法】様式は問いません。

ご住所 お名前 電話番号を記載の上 郵送、FAX でお願ひします。

〒574-8555 大東市谷川1-1-1

大東市役所 (市民生活部 人権室内)

人権啓発ネットワーク大東事務局

TEL: 072-870-0441

FAX: 072-872-2268

Facebook(フェイスブック)

人権啓発ネットワーク大東の活動がみなさんに届くよう、Facebook ページを開設しました!ぜひ、フォローお願いします!

(Facebookで「人権啓発ネットワーク大東」を検索!⇒)

